

# 教室のなかの横光利一

横光利一文学会 第七回研究集会  
於 國學院大学 2006年9月2日(土)

〔講演〕

- 小説の読み方  
—「蠅」に触れて—

〔報告〕

- 教室のなかの「蠅」と文学史のなかの「蠅」
- 権力としての読書行為  
—「蠅」を中心に—
- 外的読解からの転回  
—「蠅」の教材化の意味—

〔まとめ〕

- 「教室のなかの横光利一」から見てきたもの

講演者

田 中 実  
(都留文科大学)

報告者

山 崎 義 光  
(大阪府立工業高等専門学校)  
石 田 仁 志  
(東洋大学)  
佐 藤 泉  
(青山学院大学)

司会者 田 口 律 男  
(龍谷大学)

## 研究集会のアウトライン

横光利一文学会は、横光利一〔二八九八—一九四七〕の文学を中心に、幅ひろく現代文学にアプローチすることを目的とした研究会である。第七回にあたる今年の研究集会は、「教室のなかの横光利一」を共通テーマとし、だれもが通過する「教室」において、横光の作品がどのように読まれてきたかを検討した。

対象にしたのは「蠅」〔一九二三〕。阿武泉氏作成のデータベースに依拠した野中潤氏の調査によれば、横光の作品のなかで戦後の高校教科書に最も多く採用されたのが「蠅」(26冊)である。定番の教材には速く及ばないが、なかなかの人気教材といえる。しかしこれらまで、教材としての側面から「蠅」というテキストが問題にされたことはほとんどなかった。当日、私たちの「教室」のなかで、「蠅」はどんなふうに飛翔したのだろうか？ その一端を紹介したい。

## 教室のなかの「蠅」と 文学史のなかの「蠅」

教室のなかには、「評価」を前提として授業が位置づけられる制度的な規制がはたらく。また、教える側が選択した教材を通じて問いかけ、学習者が答えるというコミュニケーションの形態が基本となっており、教える側の選択と問いの「ねらい」にしたがって教材が扱われるという目的論的な規制もはたらいている。教室のなかにはたらくこうした構造的な力は、小説が読まれるにあたっても作用する。

そこで、今回のテーマにもつとも関連の深い「蠅」の先行論文の中から、難波博孝「終わり」を消費させる「蠅」(『新しい作品論』へ)、新しい教材「へ2」(『右文書院一九九九・二』)をとりあげてみたい。難波は、認知の際にはたらく自己・相手・目的・修辭・思考・世界についての意識活動であり理解の

枠組みとなる「メタ認知」の変容を促すことを「教育内容」とし、そういうねらいに照らして「蠅」の教材としての適否を問題とし、他人ごとのように出来事が語られ、読み手に同化をうながさない「蠅」の物語構造は、「致命的な欠陥」をもつと論じている。

一方では、文学史上の画期的な位置づけをも与える「蠅」が、教材としては不適合になつてしまふのはなぜだろうか。

難波は、「蠅」というテクストの歴史性を捨象し、代わりに、一九九〇年代の学習者の現在というコンテクストに、このテクストを位置づけて論じている。テロや大事件など様々な「終わり」が「報道」される、「終わり」の終着点のない閉塞的な状況」が、若い学習者の置かれた社会的コンテクストだといふ。難波のいう「終わり」は漠然としたと

らえ方だが、社会を支える規範や物事の考え方の信頼すべき理解枠組みとしての大きな「物語」が通用しなくなるとともに、脈絡の見えにくい破局的な出来事が頻発し常態化する時代という現在認識である。そのなかで、破局的な出来事を他人ごとのように消費させてしまう「蠅」を読んでも、報道に日々接している学習者の理解枠組みを変えようように促すことがないというわけである。

脱歴史化されたテクストの同化読みを通じて読み手のメタ認知的な枠組みを相対化し変容を促すという「教育内容」は、佐藤泉が『国語教科書の戦後史』(勁草書房 二〇〇六・五)で指摘している、一九八〇年代以降浸透する「歴史なき個人」という主体を産出する言説編成」の教科書が照準してきた「自己再帰的な主体」への教育に相当するように思われる。それは、定番教材の小説である「羅生門」「山月記」「こころ」「舞姫」そして「城の崎にて」などにも共通しているのが、自己認識・自己意識をめぐる物語だということと無縁ではないだろう。「城の崎にて」は、事故という「終わり」を体験することから療養

にでかけた城の崎温泉で、死をめぐる認識を深め、その意味で「変わる」主体が描かれる。この小説は、難波のいう「教育内容」にも適合するように思われる。

文学史的な視点に立つて見るとき、横光と志賀とは、その影響関係がしばしば指摘されている。渋谷香織「横光利一「蠅」——志賀直哉「出来事」との類似性をふまえた一考察」(『駒沢女子短期大学研究紀要』33 二〇〇〇)

・三)は、「出来事」と「蠅」の類似性を指摘し、「人間と蠅の存在価値の逆転、この発想こそが、横光の志賀との差異である」と論じている。また、「出来事」に登場する蝶と「蠅」の蠅との、モチーフとしての類似性と差違を述べるにあたり、「動物を扱うという点には志賀直哉の影響があると思われる」と指摘している。渋谷の指摘した観点を明治末から昭和にかけての文学史にまで拡大し、その系譜のなかに「城の崎にて」をおき、それらとの対照性において「蠅」の特異性を浮き彫りにしてみることができよう。

明治四十年前後から大正にかけて「小品」というスタイルが流行していた(木股知史

『小品文学の世界』『明治大正小品選』おうふう 二〇〇六・四)。「白樺」にもその流行の余波が反映している。この「小品」という形態の流れを汲むと考えられるが、明治末以降の文学史には、主体としての人間と客体としての「生きもの」という枠組みで、自己意識・自己認識をめぐる出来事が語られるテクストの系譜が存在する。たとえば、漱石「文鳥」、荷風「狐」、吉江孤雁「死」は「城の崎にて」との類似を指摘できるであろう。また、横光にも小鳥を飼いはじめてから死に至るまでを描いた「犯罪」がある。広津和郎の動物小品群や、志賀の影響がある尾崎一雄、梶井基次郎「冬の蠅」等。志賀「小品五つ」(大六・七「白樺」)もまたそれに連なるものである。執筆時期が同じ頃で、題材として「生きもの」を扱う点でも共通しており、そのスタイルからも「城の崎にて」は、「小品五つ」の「家守」などとの近接において読むことができる。

それをふまえて、「城の崎にて」と「蠅」を対照してみよう。「城の崎にて」では、事故にあった「自分」が療養に出かけ、そこで

目にした客体としての小さな（生きもの）たちの死の姿を見つめながら、自らの死についての想念や心境が物語られる。それに対して、「蠅」はカメラ・アイ的な視点から、互いに他人同士の複数の人間達が客体として扱われ、事故に遭う出来事が語られる。主人公といふべき登場人物はおらず、乗客たちはそれぞれに馬車に乗る目的をもつて登場するが、一緒に事故にあうこと以外にはほとんど関係しない。「城の崎にて」が、客体としての複数の小さな（生きもの）たちの死を見つめる「自分」に内側から焦点化され収斂する語りであるのに対し、「蠅」は、複数の人たちを客体として焦点化しつつ、それと同時に、蜘蛛の巣から脱出して馬の背に乗った蠅が事故を回避して飛び立つにいたる情景が、も第三者のカメラ・アイの視点から、人間と（生きもの）とを同列に、呈示する。落ちた馬車の乗客たちは、最後の事故にむすびつくような（悪人）として描かれてもおらず、したがって超自然的な因果応報・勧善懲悪の物語としても読みにくい。ただ、この小説は、乗客たちの性質や行動とは交差しない、迂遠

な因果関係の連鎖、すなわち、乗客たちはそれぞれが用があつて馬車に集まつてくると、馱者は馱者で饅頭が蒸し上がるのを待っていること、胃の腑に落ちた饅頭が馱者の眼をささうこと、その居眠りが事故にむすびつくことという、人間個々の意思とは迂遠なモノの因果系列の連鎖によつて事故が生じたように描かれる。そして、人間たちの事故とは、無縁、かつ対照的に、蠅が蜘蛛の巣から脱出する様子が冒頭におかれ、ラストでは墜落する馬車からの脱出が描かれている。「蠅」のカメラ・アイ視点については、これまで繰返し言及されてきた。一九世紀末に映写機が発明され、二〇世紀に発展した映画が、カメラ・アイという虚無的な視点を生み出したわけだが、それは科学・技術の発展と社会への普及を促す資本主義、資本主義が生み出し前提とする大衆化社会といった二〇世紀近代社会の変容とも無縁ではない。「蠅」の研究史には、すでにこうした社会・歴史的な視点から、このテキストの特質について論じたものがある。吉本隆明は『言語にとつて美とはなにか』のなかで、「表出の対象の等

質化」、「主客」の「交換可能」性という原理を横光の初期作品に見ており、それをふまえて塩田勉「横光利一」『蠅』覚書―「構図の象徴性」とは何か」（『比較文学年誌』26 一九九〇・三）は、「蠅」には、農業中心から高度な産業資本主義に移行する時代、すなわち、労働過程の細分化、大量の商品の生産・流通・消費、さらには消費を促進するための宣伝といったサイクルに人間の肉体も精神も巻き込まれ、万象を生命の輝きのない交換可能な「物体」として扱いはじめ、「物象化」によつて流動的なモノの魔力にとりつかれていく時代の到来が書き込まれていると指摘している。そのうえで、「横光は、まさに「物象化」を文体の原理とした最初の日本人作家の一人であつたのだ」と論じた。小説「蠅」は一方で、（生きもの）を登場させながら、しかし（生きもの）テキストの系譜にあるような、見る主体、語る主体としての人間中心の自己認識・自己意識の物語構造とは異質で、吉本や塩田が明らかにしたように、（生きもの）やモノと人間を同列に把える物象化システムを前景化する構造をも

つた小説として読むことができる。

難波論文は最後に「この作品を『教材』にとどめる残された唯一の道は、『蠅』の話者（作者ではなく）を徹底的に批判することである」と述べている。「人々を冷やかに見る話者、事故の要因を饅頭に見る話者、無生物主語を多用する話者を批判し、「語りを破壊して語り変えること」、「物語世界の事態はそのままに、読者が語りの世界に介入して語り変えること」の必要性を述べる。このような語り直しは、難波も言うとおりテキスト固有の論理を破壊することであり、逆に、読み手の世界把握の理解枠組みのうちにテキストを回収してしまうことになるのではないか。現実の事故に対処するには、そういう語り直しも必要かもしれないが、小説から現実が起こった事故やその報道に対するのと同様の反応を見せることが、小説の読み方として唯一とられるべき読み方だとは思えない。「蠅」は、物語る主体や人間の心理・意図と結びつけて読む「同化読み」という読み方そのものを突き放すが、だからこそ、「同化読み」という読解枠組みをこそ変えるよう迫つ

ているのであつて、「教材としての限界」というよりは、むしろ、「同化読み」の限界を露呈させるテキストだといふべきである。そうだとすれば、このテキストを教材として教

科書に組み入れておくことは、「同化読み」という固定的な小説の読み方に凝り固まつた読み手の肩を、一揉みするほどの意義を有すると言える。

# 国文学解釈と鑑賞

平成19年2月号

## 目次

### 特集Ⅱ藤沢周平の世界

文学アルバムⅡ藤沢周平／渡部芳紀	5
時代小説の郷愁／桶谷秀昭	10
藤沢周平をめぐって	
藤沢周平の近代と反近代／宮澤健太郎	17
藤沢周平の女性観／志村有弘	21
藤沢周平の宗教性／中村三春	29
藤沢周平作品の映画化／佐藤忠男	33
藤沢周平の文体／齊藤明美	39
藤沢周平先生の思い出／大滝澄子	47
作品の世界	
「暗殺の年輪」 「侍の皮」と「汚れた手」／森 晴雄	50
「又蔵の火」について／松田静子	56
「義民が駆ける」／田中榮一	61
「橋ものがたり」／岩田恵子	68
「春秋山伏記」／野乃宮紀子	74
「一茶」 実事と虚構との距離を測りつつ／復本一郎	80
「春秋の檻―獄医立花登手控え―」寸評／香内信子	85
「孤剣・用心棒日月抄」 その構成と哀感をめぐって／馬渡憲三郎	91
「海鳴り」／宮下全司	96
「白き瓶」 雞頭はいよいよ赤く冴えにけるかも／三枝昂之	104
「たそがれ清兵衛」／菅原洋一	109
「風の果て」 青春の崩壊／槍田良枝	114
「本所しぐれ町物語」 愛と性を考えさせる物語／須田久美	119
「三屋清左衛門残日録」 理の人／情の人／小林幸夫	124
藤沢周平「市塵」論 権力の移動をめぐって／原 卓史	129
「漆の実のみゝる国」／蒲生芳郎	134
藤沢周平のエッセイ／神田由美子	139
研究の手引き	
藤沢周平文学散歩／渡部芳紀	144
藤沢周平参考文献目録／五十嵐康夫	170
教室のなかの横光利一 横光利一文学会研究集会リポート (講演者)田中 実 (報告者)山崎義光・石田仁志・佐藤 泉 (司会者)田口律男	
連載 近代訳語を検証する	
42 メルキ・メルク・ミルク はか／杉本つとむ	193
75	175

本・人・出版社Ⅱ正宗白鳥の『人を殺したが』(聚芳閣刊)	
石井鶴三の装幀・挿絵	
／紅野敏郎	202